

第3章 京都大学病院構内A H15区の発掘調査

伊藤淳史

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部附属病院西構内の東端、鴨川から約300mに位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる（図版1-384, 図41）。ここに、京都大学（南部）基幹・環境整備（自家発電設備建屋）工事が計画されたため、発電設備建屋部分437㎡（西調査区）と地下オイルタンク設置部分146㎡（東調査区）の予定地全面計583㎡の発掘調査をおこなった。調査期間は2012年6月25日～9月7日、出土遺物総量は整理用コンテナ41箱。

周辺は、平安後期白河院の御所「白河北殿」の北辺地域に比定されており、それを裏付けるように調査地南方一帯の19・39・122・200・339（北）地点などで、12世紀後葉～14世紀代を中心とする多数の遺構・遺物がみついている。一方、それより西方の192・198地点、349地点などでは、中世以前の成果は認められず、近世以降の耕地開発の過程を物語る井戸や水路、路面などの遺構が中心となっている。よって今回は、古代～中世遺跡の北への広がり確認と、近世遺跡としての情報蓄積が課題となる場所であった。

調査の結果、東調査区は基盤の砂礫層上面まですべて攪乱されており、大学設置以前の遺構は遺存していなかった。一方西調査区では、現地表より約1m下に厚い近世遺物包含層が良好に遺存しており、南西方向にはしる流路と堤防状の盛土遺構、路面、集石、井戸などがみつかった。流路や井戸の埋土からは近世末期の陶磁器類がまとまって出土したも

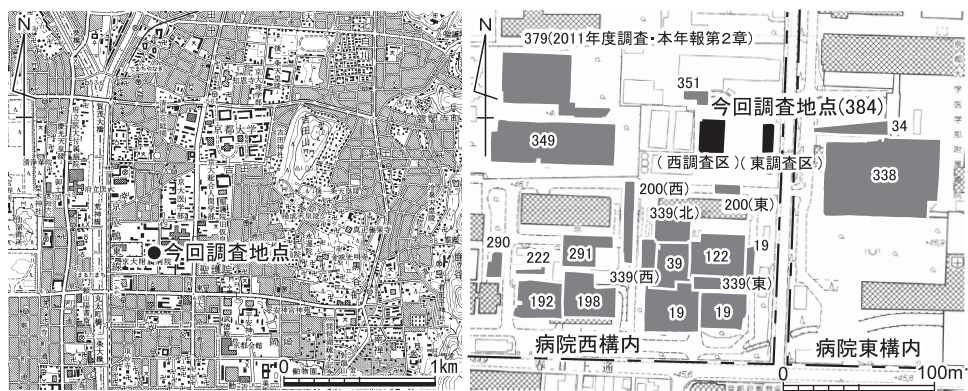


図41 調査地点の位置（左：1/5万，右：1/5000）

の、中世以前にさかのぼる遺物は、基盤の砂礫層などから摩滅した破片が微量出土したにすぎなかった。これより、調査地一帯が開発されたのは近世以降であり、中世以前の遺跡のひろがり今回の調査地までは及んでいない、と判断された。なお、大学設置以降の資料であるが、表土中に附属病院で使用したとみられる磁器製食器類（「病院食器」と略称する）が大量に廃棄されていたため、一部を回収して報告することとした。

今回の発掘調査と遺物整理事業は伊藤淳史が担当し、長尾玲が補佐した。このほか、磯谷敦子・河野葵・佐々木夏妃・高木康裕・鶴来航介・西田陽子・新田和央の助力を得た。本章は伊藤淳史が執筆したが、第4節の附属病院関連の遺物については、おもに新田和央が整理した。

2 層 位

X=950ラインに沿って設けた東西畦の北面と、それより15m程度北方にある調査区北壁の層位を示す（図42）。

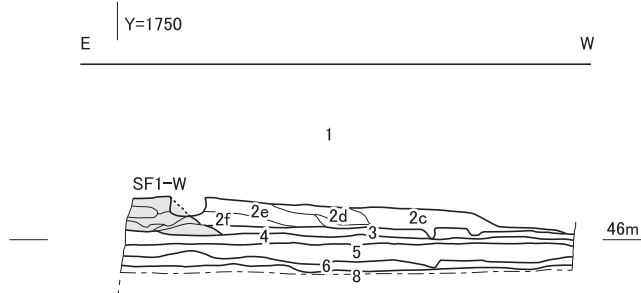
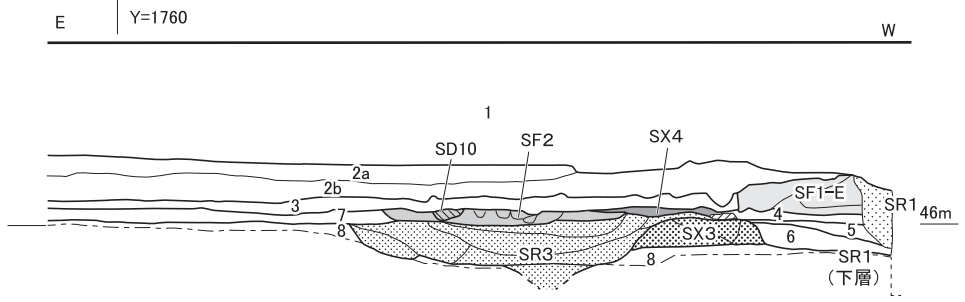
調査区の現地表の標高は約48m前後、近代以降の盛土や攪乱層である第1層の表土は約1.2mの厚さをはかる。このうち上半の0.5m程度は、近年駐車場として整備するために盛られた客土のバラスが主体となっており、残りの下半が、先述した附属病院使用の磁器製食器の大量廃棄や石炭ガラを交えるような大学設置以降の廃棄物を主体とする堆積である。

第2層の灰褐色土は、おもに幕末期を中心とする近世後半以降、一帯が大学の敷地となる明治35年（1902）ころまでの遺物包含層。東西畦では2 a・2 bの2層に、北壁付近では2 a～2 cの3層に細別できる。いずれも黒色系の腐植土層で、大学設置以前に耕地であった際の形成層とみられるが、色調の明暗に差異があり区別可能なほか、礫を主体とする間層が介在する場合もある。また、北壁で見ると、最上位の2 a層は流路SR1埋積後の上面を覆っている。このように、時間差をもって堆積したことは確実だが、出土遺物の内容には顕著な差を見出すことはできなかった。なお、東西畦北壁で見ると、流路SR1よりも西方では、斜位方向の堆積としてさらに細分可能であり、2 d～2 fとした。流路や堤防状の土手SF1が機能している期間中に堆積していったものであろう。

第3層の淡褐色土は、基盤の砂礫層上面に薄く形成されている土壌化層で、地点によってシルト～砂質土主体や粘質土主体の場合がみられるなど、不安定ではあるがほぼ全域で確認できる。少量の近世遺物を包含するが、染付磁器類はほとんど確認されないため、近世でも前半期に形成された堆積であろうとみられる。

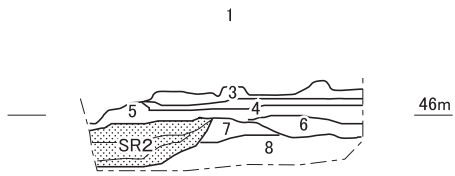
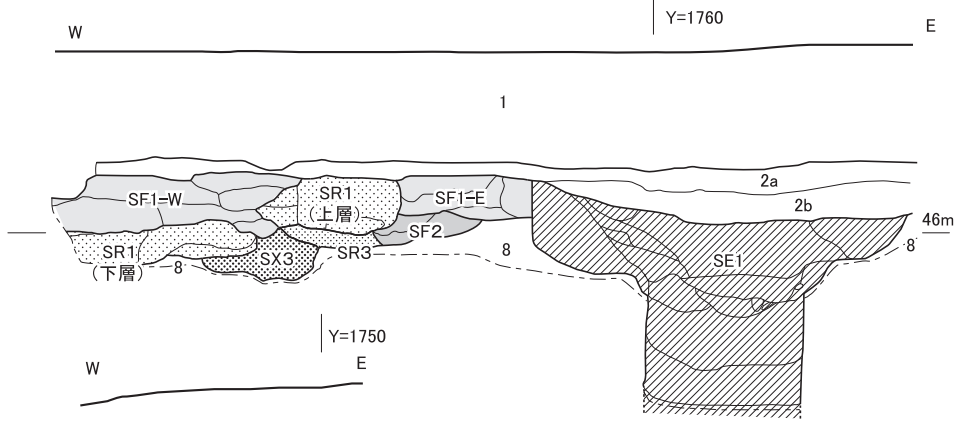
層 位

[東西畦 (X=950 ライン) 北面]



[調査区北壁]

- 1 表土・攪乱
- 2a ~ 2f 灰褐色土1~6
- 3 淡褐色土
- 4 淡黄灰色シルト
- 5 暗灰色砂礫
- 6 青灰色シルト
- 7 黄褐色砂礫
- 8 赤褐色砂礫



- 1 表土・攪乱
- 2a ~ 2c 灰褐色土1~3
- 3 淡褐色土
- 4 暗褐色粗砂
- 5 褐色砂礫
- 6 灰色砂礫
- 7 灰黄褐色砂礫
- 8 黄褐色砂礫



図42 西調査区東西畦 (X = 950) 北面および調査区北壁の層位 縮尺1/80

第4層以下第6層までは、東西畔と北壁とで異なるが、いずれも流路SR1付近とそれよりも西方に堆積が確認されるシルト層や砂層、あるいは砂礫を主体とする堆積層などで、流れと安定の繰り返しにより形成されたものとみられる。時期を特定しがたい土師器の細片のみしか包含していないが、近世に下る時期のものはみられないようである。

第7層黄褐色砂礫および第8層赤褐色砂礫は、調査区全域の基盤となっている堆積層で、20cm程度大の礫をまじえる。最も下る時期で15世紀ごろかとみられる遺物を認めることができるので、おおむねその段階以降、中世末ごろまでに形成された堆積と想定する。

3 遺 跡

(1) 遺 構

東調査区は全く遺存していなかったため、西調査区のみ主要な遺構の特徴を報告する。灰褐色土除去後、淡褐色土の上面で検出できた遺構を近世遺構1、そこからさらに基盤の砂礫層上面まで掘り下げて検出された遺構を近世遺構2とする（図43・44）。

流路SR1 調査区中央付近を南西流し、遺物を多量に含む白色粗砂層が厚く埋積する。下層には青灰色のシルト層や砂礫層などが幾層も堆積しており、水流と滞水を繰り返しながら埋積が進んでいたところに、洪水により一気に粗砂で埋没し廃絶したとみられる。白色粗砂層の厚さから想定して、廃絶時には幅・深さとも1m程度の規模になっていたことがわかる。この白色粗砂層を上層とし、それ以下の埋積を下層とした。下層については、図42にみるように、西側の立ち上がりははっきりしないが、2m以上の幅があったとみられ、方向も正位の南流に近くなっている。東側の立ち上がりには下層集石SX3や配石SX4、路面SF2などをともなう。時期を特定できる出土遺物にとぼしいが、SX3やSF2からは16世紀ごろかとみられる土師器が出土していることから、中世末～近世初頭の段階には河道として流れが生じており、人による働きかけが開始されていたものといえる。その後近世前半期にかけて埋積が進み、近世後半期以降用水路としてあらためて整備され、幕末～明治初頭ごろに洪水で廃絶した、という変遷を想定している。

路面SF1 上記のSR1下層の埋積後に、東西両岸に礫を交えた盛土で堤防状の土手が構築されており、その上面は礫敷きされて畦道のような状態を呈していた。これらをそれぞれSF1-E・SF1-Wとした。盛土内からは近世後期の陶磁器類が出土している。そのころに用水として流路を制御し安定化するために築かれた施設といえる。

井戸SE1 調査区東北の北壁際で検出された、一辺3m程度をはかる不整形の井

遺 跡

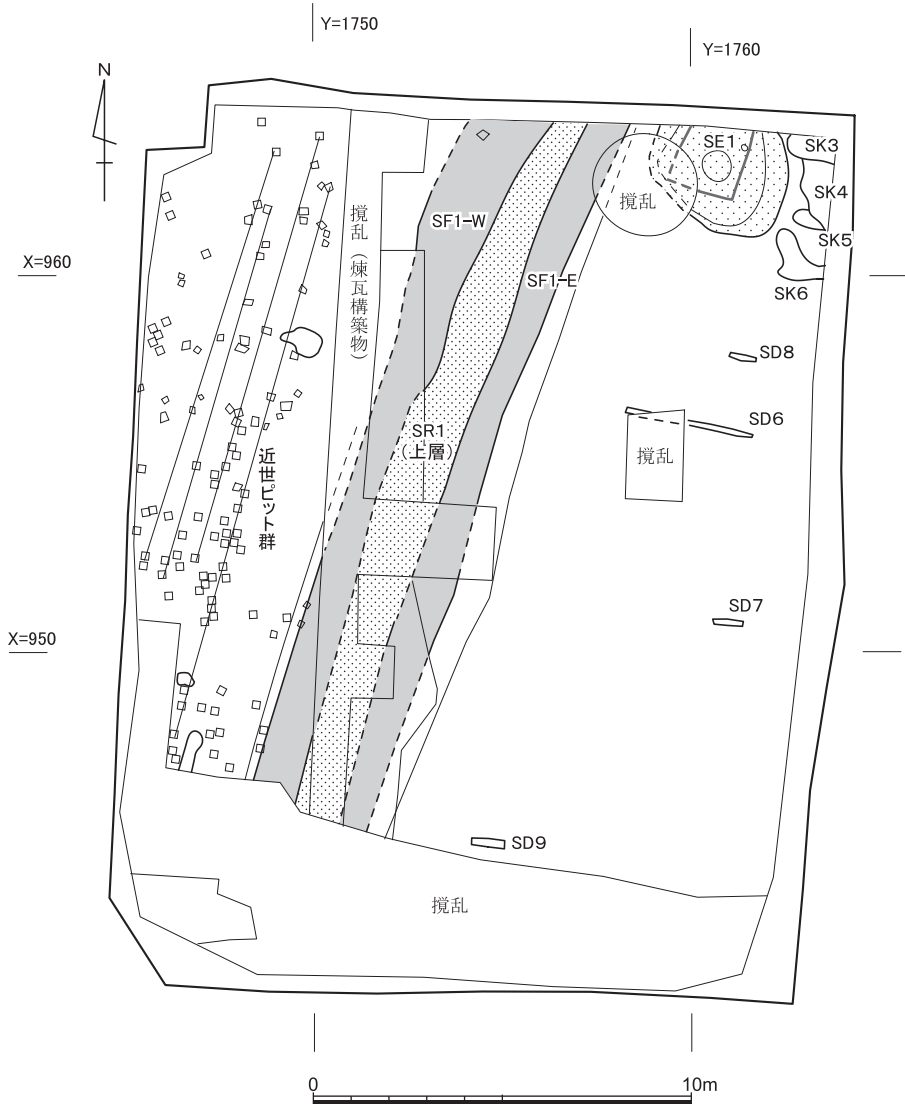


図43 西調査区近世遺構1（淡褐色土上面検出遺構） 縮尺1/200

戸。三分の一程度は調査区外となり、断面が北壁にかかる（図42）。上半は粗砂と大量の遺物をまじえた砂礫で一気に埋積しており、上記のSR1を廃絶させた洪水でともに埋没した可能性が高い。下半部は、2m四方程度の方形の木枠が設けられており、厚い横板や内側でそれを支えた杭の痕跡が確認できた。水溜部は、崩落が著しいため確実な底面の確認まで至らなかったが、径1m弱深さ50cm程度の桶を用いており、桶の部材であった短辺

京都大学病院構内A H15区の発掘調査

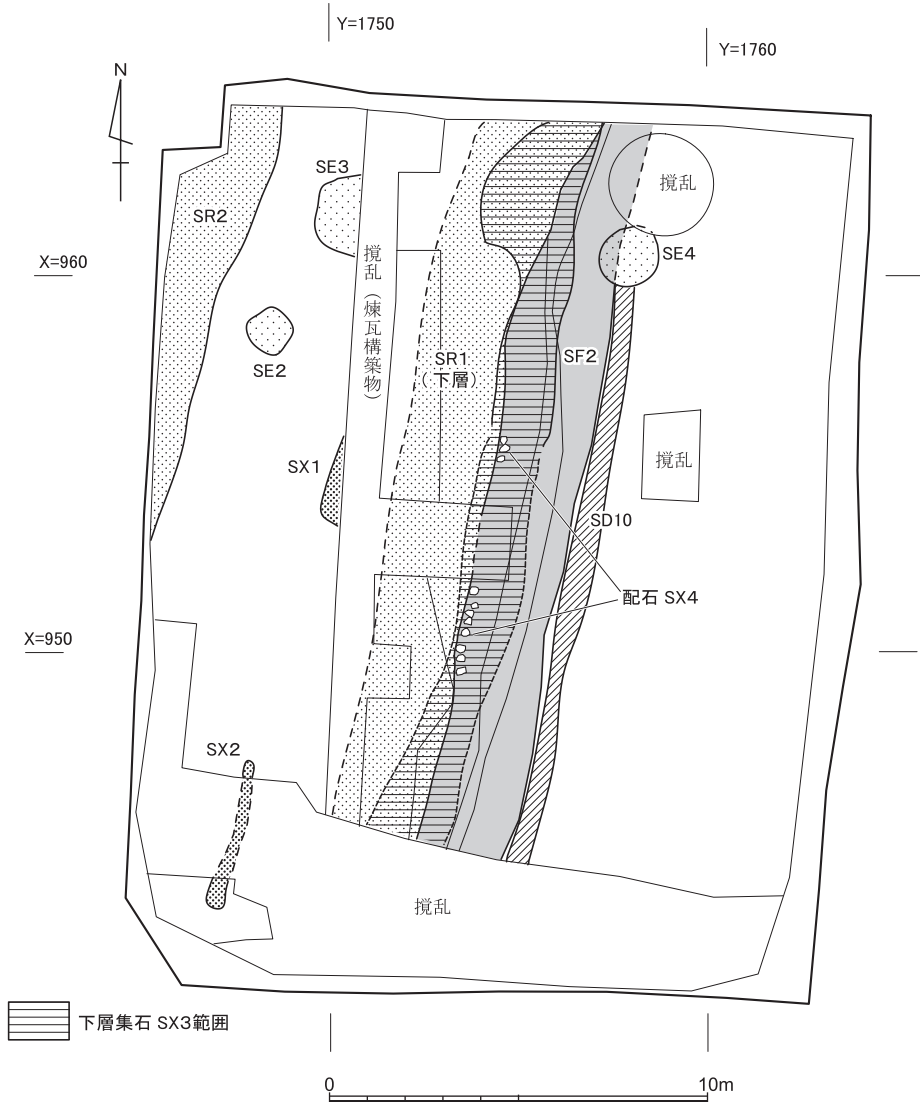


図44 西調査区近世遺構 2 (砂礫層上面検出遺構) 縮尺1/200

7 cm程度の長方形板材の細片が遺存していた。最深部でレベルは43.6m。

近世ピット群 流路SR1の西側からは、淡褐色土上面において、一辺15cm程度の方
 形の小ピットが多数検出されている。深いものは30cm以上掘り込みを確認できる。構内遺
 跡の他地点で通有確認されているものと同種の遺構で、作物懸架用の柵の痕跡であろう。
 SR1の東側からは明瞭なものはほとんど確認されず、浅い小溝SD6～9が検出された

にとどまる。流路を境として土地利用形態が異なっていた可能性が高いといえる。

SK3～6 調査区東北隅で、灰褐色土を埋土とし、互いに切り合うような不定型な土坑が複数検出された。性格は不明である。

SX1・SX2 拳大程度の小礫による集石遺構で、淡褐色土を掘り下げる過程で検出された。SR1の西側を並行するような位置にあるが、攪乱による破壊が著しく全容は不明である。南北の両端が把握されたSX2の断面でみると、砂礫層上面に幅40cm程度で小礫を密に積み上げたような状態であった。近世後半の陶磁器類が包含されており、SR1下層が埋積した後の段階の遺構であろう。

流路SR2 調査区西辺の砂礫層上面において、南西流する流路の痕跡を確認した。西側の立ち上がりは調査区外となるため不明だが、深さ50cm以上で、細砂・粗砂・砂礫が互層となって埋積している。上層から16世紀ごろかとみられる土師器片が出土しており、SR1下層と同様に、中世末～近世初頭には生じていた流路であって、近世前半期のうちには埋積していたものといえる。

集石SX3 SR1下層の東肩に20cm程度までの礫が粗砂を交えながら厚みを持って埋積している集石遺構（図版10-3）。地点によっては広がりや厚みが異なり、特に調査区北壁付近は密度濃く礫が集積している。礫を取り上げて完掘し得たのは北半のみであるが、礫の密集度を薄くしながら、南へも続いていることを確認している。先述したように16世紀ごろの土師器片が出土しており、形成時期の手がかりとなる。SR1下層が機能していた中世末～近世初頭ごろに、流路の肩を保護するために礫を集積させた護岸状遺構の可能性があるとともに、埋積後の上面に路面や配石遺構が築かれているので、地盤強化の意図をもった地業であった可能性もあろう。

配石SX4 層序的には上記の集石SX3の上面にあり、SR1下層の東岸に沿うように南北に礫を並べた配石遺構（図版10-1）。中間を攪乱に破壊されているが、延長8m程度におよぶ。配石の東側は路面SF2で、配石の西側すなわちSR1下層上部には、精良なシルト層の堆積もみられた。位置からみて路肩を保護するような配石であるとともに、何らかの水場施設であった可能性もあろう。

路面SF2・溝SD10 SR1下層に並行してはしる、幅2m程度に小礫を敷き詰めた路面状遺構。東西畔の断面には、SF2に相当する部分に轍状の凹みを複数観察することができる。SD10はSF2に並行してはしる幅30cm深さ20cm程度の溝。内部には精良な白色粗砂が埋積し、SF2の側溝の機能を果たしていたと想定できる（図版10-2）。

流路SR3 北壁および東西畔の断面で確認した、粗砂や砂礫の堆積。おおむねSF2と重複するような位置で、SR1下層と同時か、あるいはそれにやや後出する時期に流れていたものとみられる。

SE2～4 SE2・4は砂礫層に素掘りされた径1m深さ30cm程度の円形土坑。桶などの痕跡は確認できず、遺物もほとんど出土していないが、形状から中世末～近世前半ころの野壺の可能性がある。SE3は1辺2m程度の隅丸方形の深い掘り込みが確認できたもので、井戸の可能性がある。ただし、大半を攪乱に破壊されており、詳細は不明。近世の遺物が微量出土している。

(2) 遺物

SE1出土遺物 (II1～II146) 上半を埋積せしめていた砂礫から大量の近世陶磁器類が出土している。染付磁器 (II1～II40) では、椀やそれに対応する蓋物、蕎麦猪口といった小形品が主体を占めている。色絵の製品も含まれるが微量である。陶器 (II41～II117) でも同様な傾向であり、灯火具や仏具などが加わっている。また、行平などの鍋類や急須も、透明釉や鉄釉の小ぶりなものが中心である。II116の底部には「洛東山」の刻印がある。土師器系の製品は多くない。II137は外面のみ著しく煤が付着しており、同種の特徴もつII138とともに蓋ではなく炮烙と判断した。II144は表面に「焼塩」の字句を含んだ押印があり、焼塩壺の蓋とわかる。II145は淡緑色を呈する軟質施釉の製品で、湾曲する薄手の器壁に窓部が設けられ、「胡麻煎カ」の陽刻がある。類似の製品は京都御所内の公家町の発掘調査において出土しており (B区土壌B687) [京都市埋文研 2004 図版349-26・27]、型作りで内部が空洞の煎り器であったとわかる。なお、公家町の調査において当該遺構出土品は19世紀前半代の基準資料とされている。今回のSE1出土資料も総体として類似の内容を持つとみられ、遺構の年代比定の参考となる。

SR1出土遺物 (II147～II201) 流路を埋積せしめていた白色粗砂層から多量に出土した陶磁器類である。上記のSE1を埋積させた洪水と由来を同じくするとみられるが、遺物の組成や年代にはやや幅がある。染付磁器ではII152やII154などのような大ぶりの鉢や皿が認められ、陶器類でもII182・II183といったすり鉢の大型品が認められる。II179は珉平焼である。II172やII177といった飛び鉋やいっちゃん描の鍋や蓋は、SE1では認められなかったが、SR1には目立つ。しかし、明らかに明治期以降に下るといえる特徴の製品は含まれないようである。

SF1出土遺物 (II202～II217) 近世後半期の陶磁器類が少量出土している。II

遺 跡

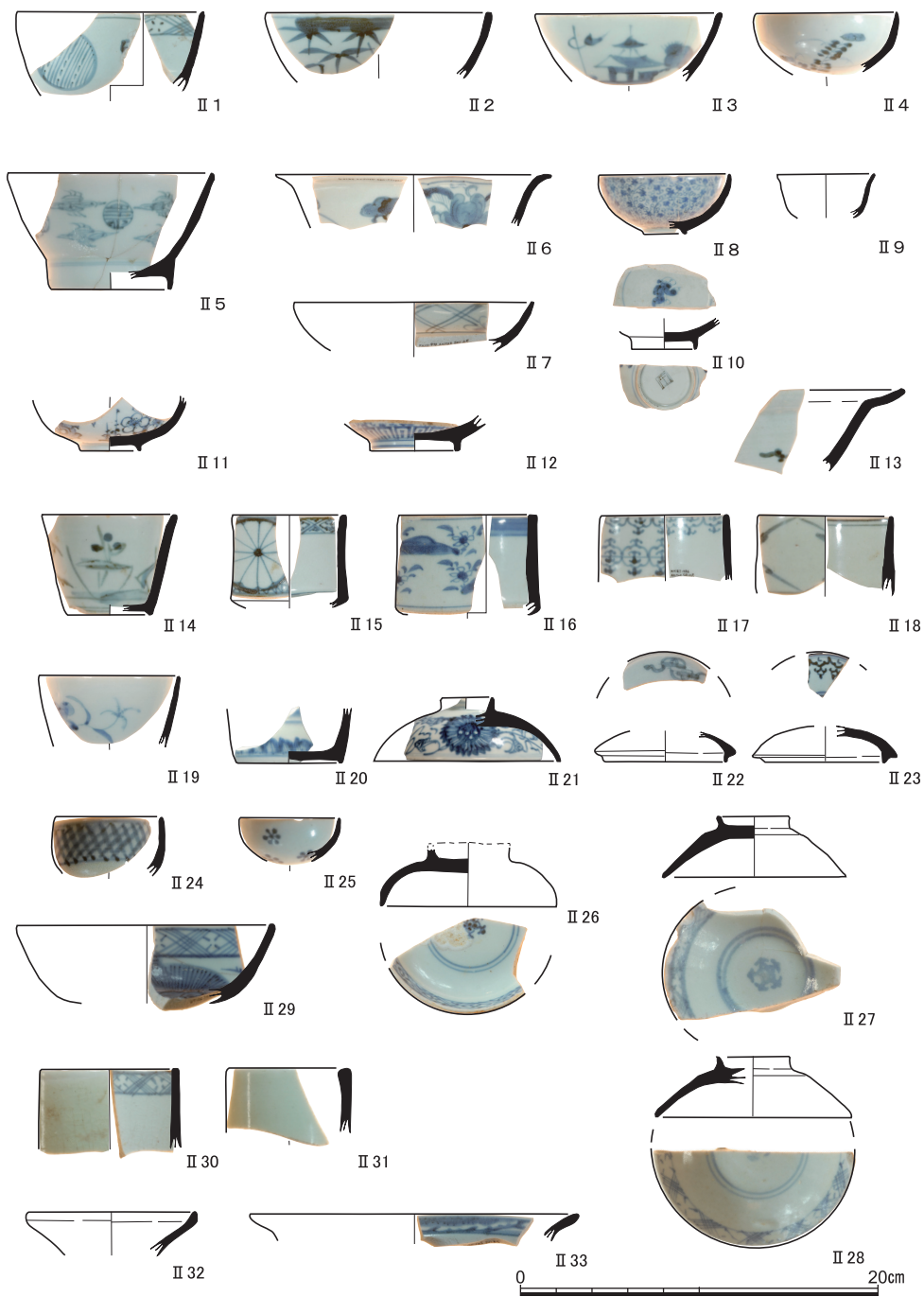


图45 SE 1 出土遺物(1) (II 1 ~ II 33磁器)

京都大学病院構内A H15区の発掘調査

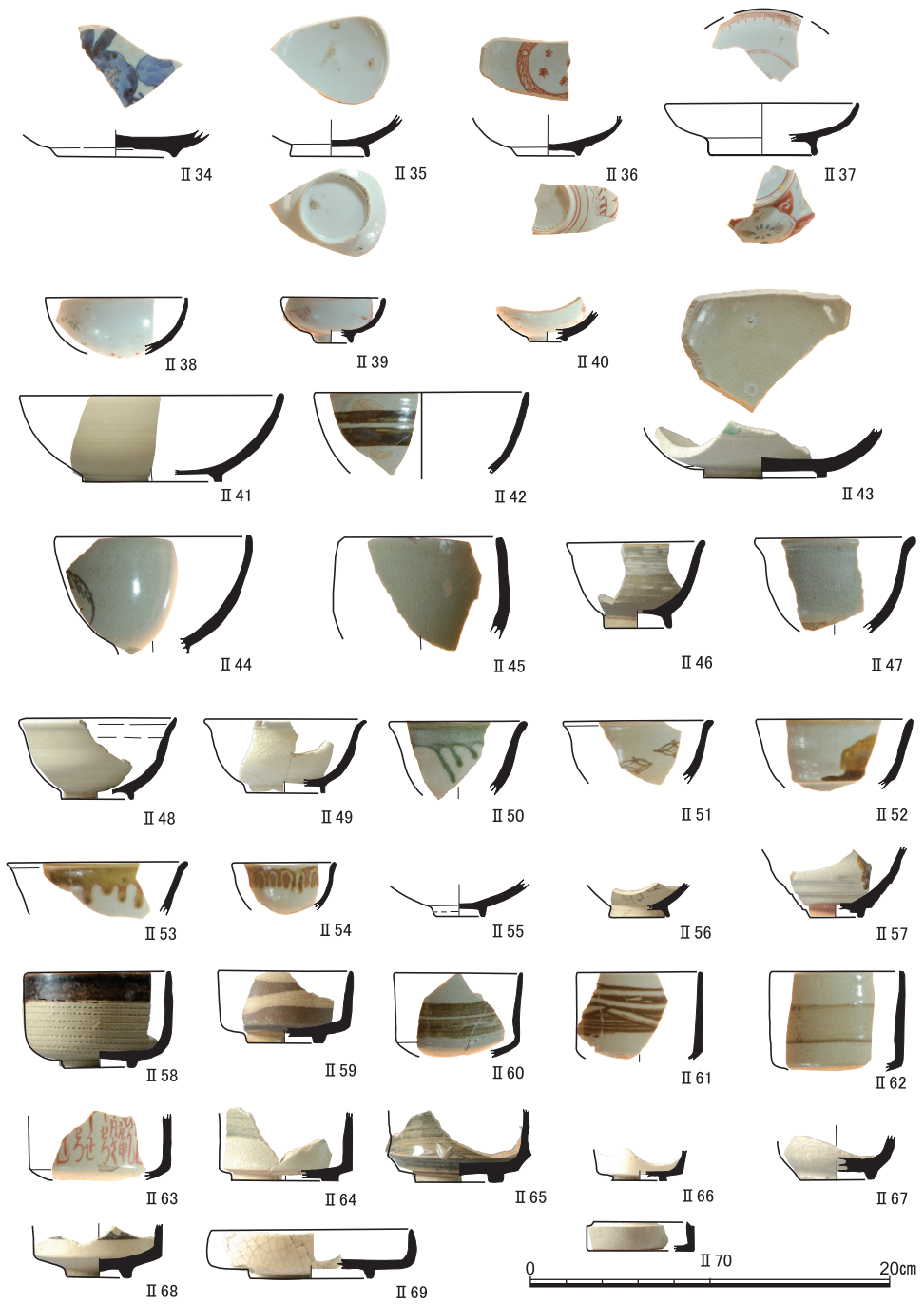


図46 SE1出土遺物(2) (II 34~II 40磁器, II 41~II 70陶器)

遺 跡

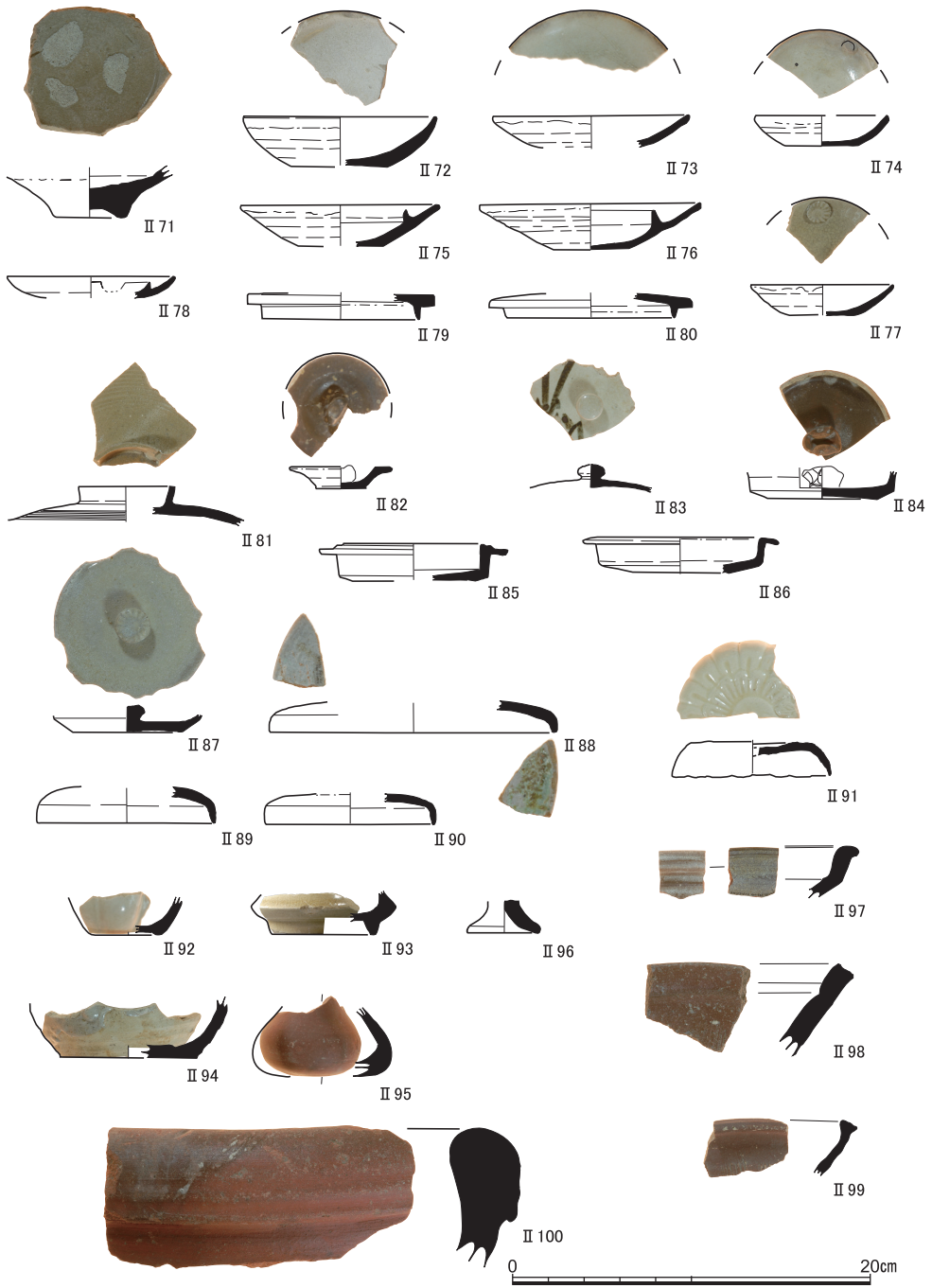


图47 SE 1 出土遺物(3) (II 71~ II 100陶器)

京都大学病院構内A H15区の発掘調査

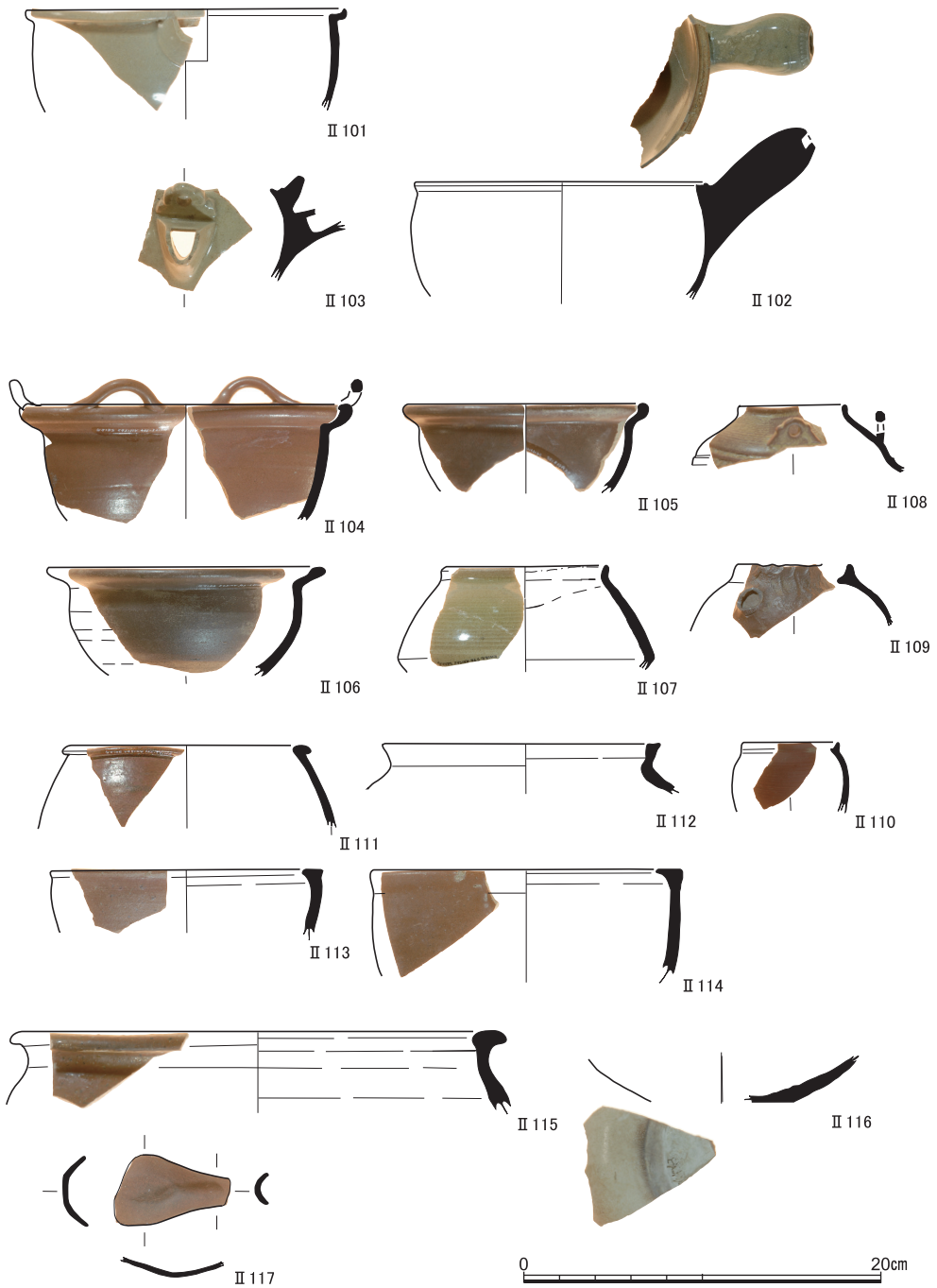


図48 SE1出土遺物(4) (II101~II117陶器)

遺 跡

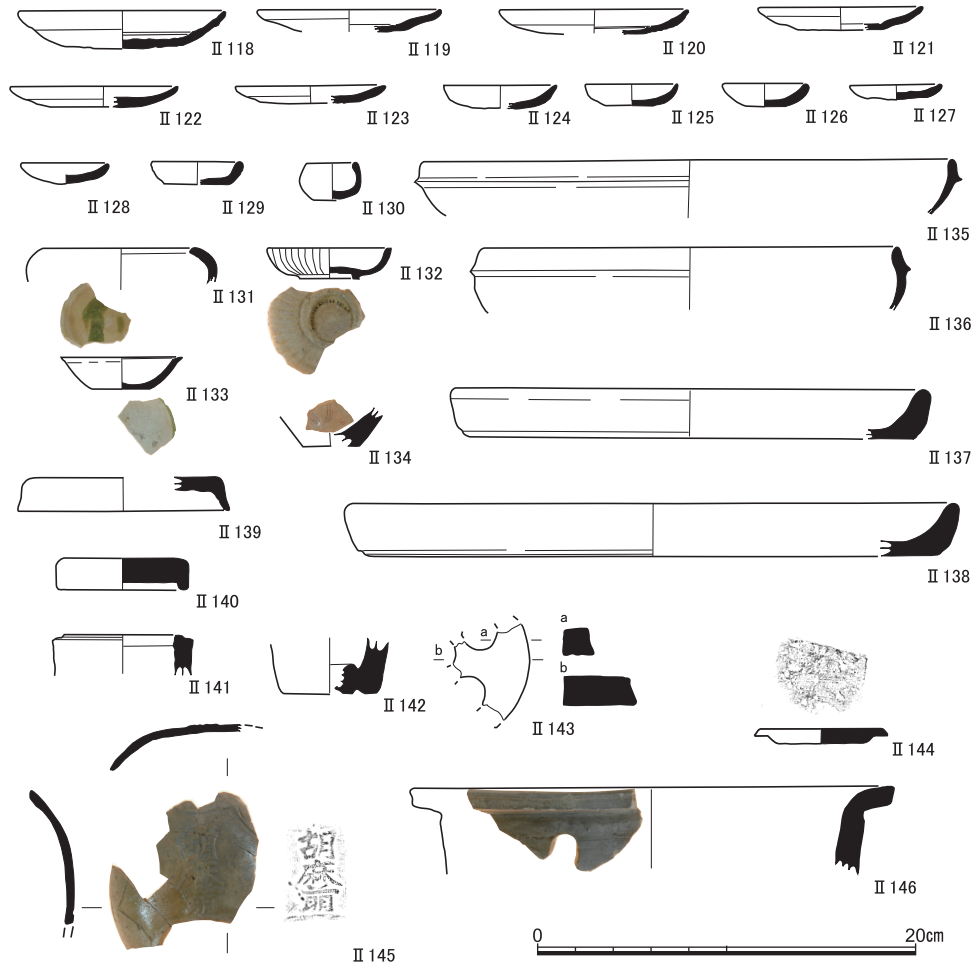


図49 SE1出土遺物(5) (II 118~II 144土師器, II 145軟質施釉陶器, II 146瓦質土器)

212は蓋状の製品で、赤褐色の堅緻な焼成である。平滑に丁寧に仕上げられている面を図上で表面とし、低平な高台状の凸部が巡る面を裏面としている。II 215は底面中央に焼成前の穿孔があり、植木鉢とみられる。

SX1・SX2・SE2・SE3出土遺物 (II 218~II 222) 集石や井戸状の土坑から少量出土した近世遺物。II 218の受け付き灯明皿は、無釉で赤褐色の陶器である。II 219は磁器染付の仏飯脚部。II 220・II 222は手づくねの土師器小皿である。

SF2出土遺物 (II 223~II 227) 中世末期ごろの土師器や瓦器片などが少量出土している。土師器の器形は16世紀代頃かとみられるものが主体である。

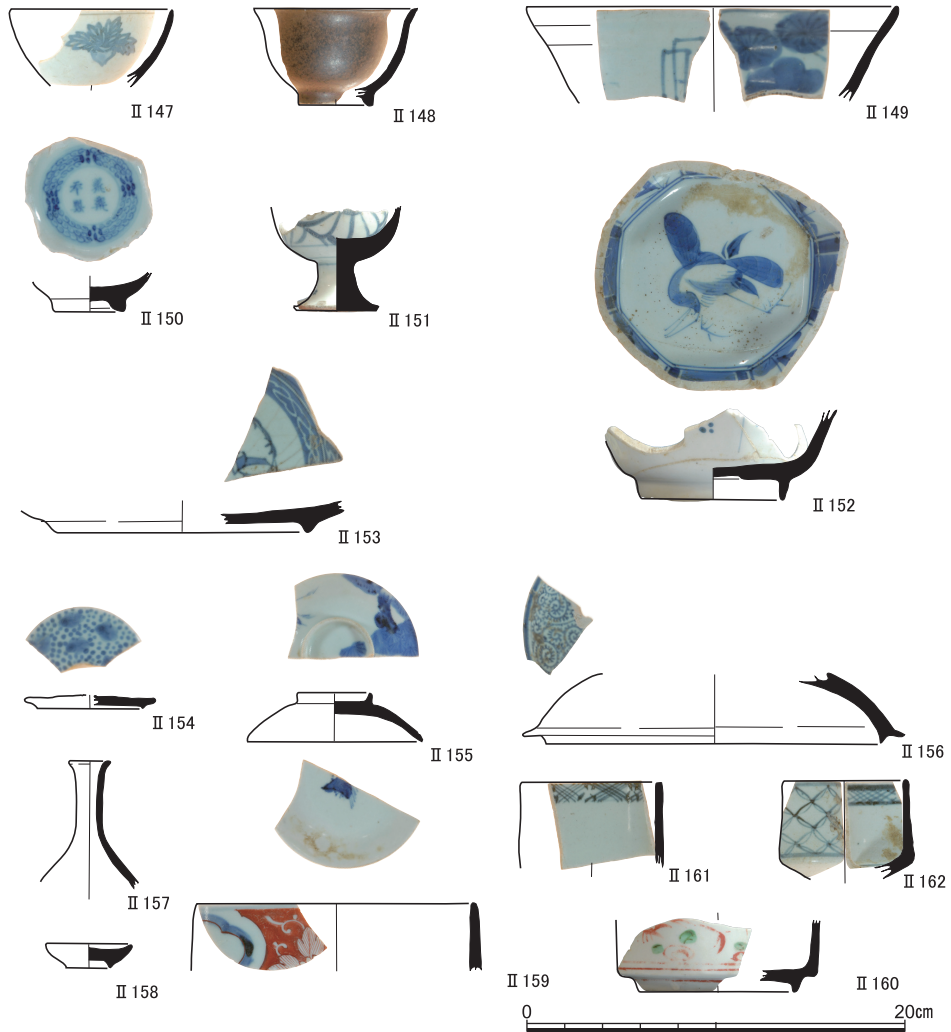


図50 SR 1 出土遺物(1) (II 147～II 162磁器)

SX 3・SX 4・SD10出土遺物 (II 228～II 235) 上記SF 2と同様、中世末期ごろまでの遺物が少量出土している。

SR 2 出土遺物 (II 236～II 240) 土師器にはII 238のような13世紀代頃かとみられるものも認められる一方で、II 236のように16世紀ごろに比定できるものまで、幅のある遺物が出土している。

淡褐色土出土遺物 (II 241～II 255) 出土したのは土師器の小片で、15～16世紀代かとみられるものがほとんどである。近世の特徴を持つものは認められない。

遺 跡

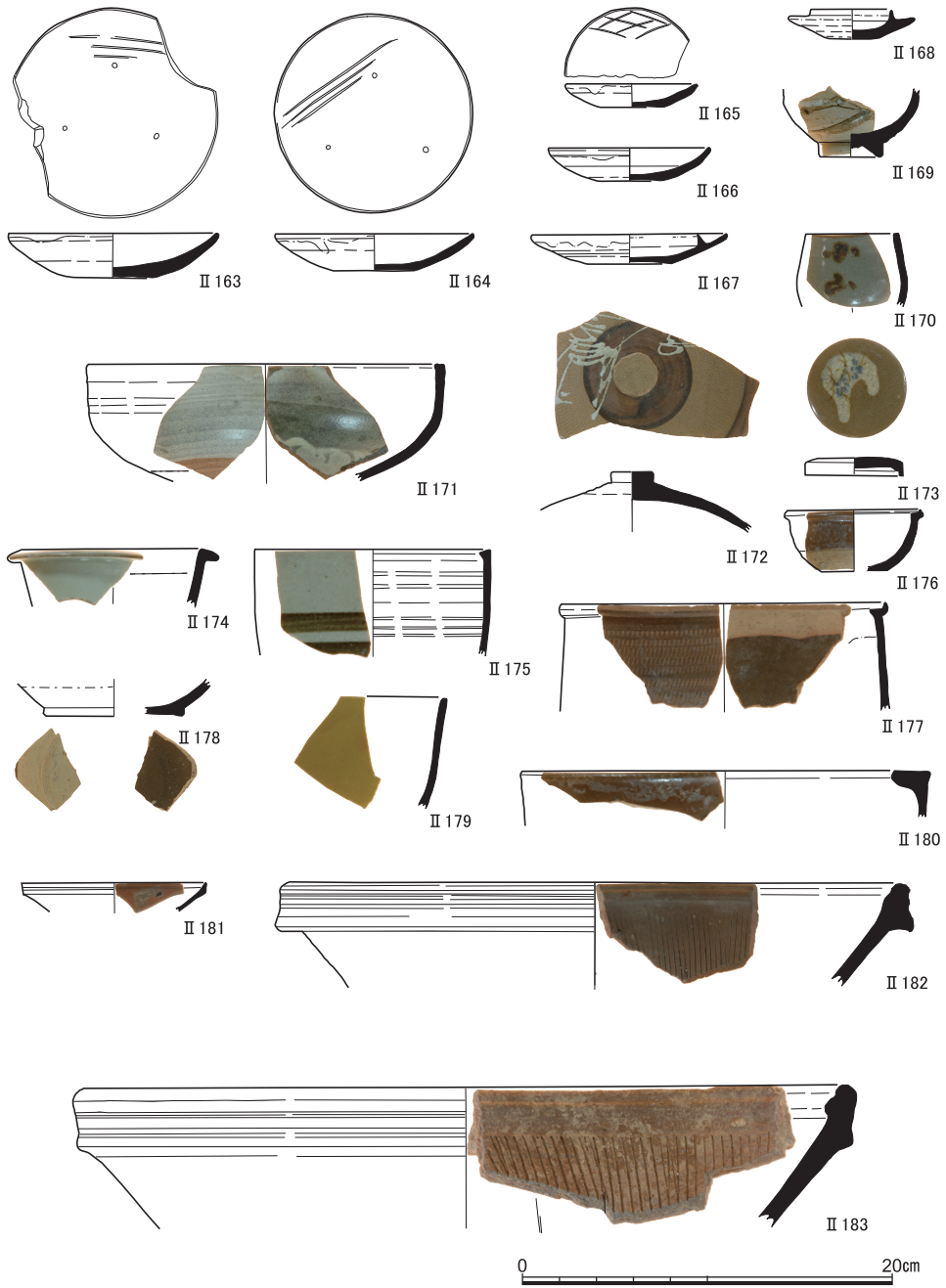


図51 S R 1 出土遺物(2) (II 163~ II 183陶器)

京都大学病院構内A H15区の発掘調査

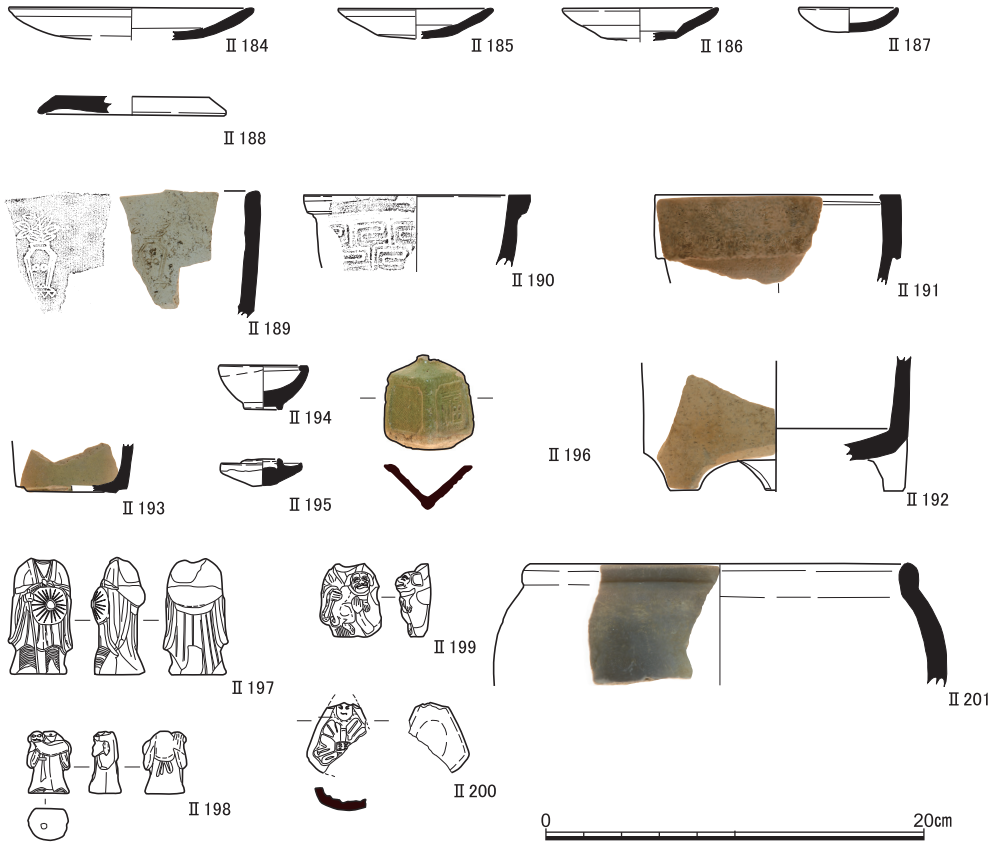


図52 S R 1 出土遺物(3) (II 184~II 193土師器, II 194~II 200土製品, II 201瓦質土器)

砂礫層出土遺物 (II 256~II 263) 摩滅した中世後半期以前の遺物も含まれるが、主体は淡褐色土と同様に中世末期の15~16世紀代の土師器片といえる。調査地の基盤が安定して活動地となっていくのがおおよそそれ以後の段階であることを示す資料と見えよう。

4 大学附属病院関連の遺物について

西調査区の西寄りの一帯には、1 mあまりの厚さがある表土中において、大量投棄された磁器製食器類が広範囲に層を成して密集している状況が確認された (図版11-1)。第2節で既述したように、この表土層は大学設置以降の堆積であり、機械力によって除去するため、通常包含される遺物も発掘調査の対象とはしていない。しかし、今回の調査地付近は、大正5年(1916)以降昭和40年代まで「賄所」と表記される施設が位置していたことがわかっており、これらの資料は、そこで使用され不要となった食器類などが一括廃棄

大学附属病院関連の遺物について

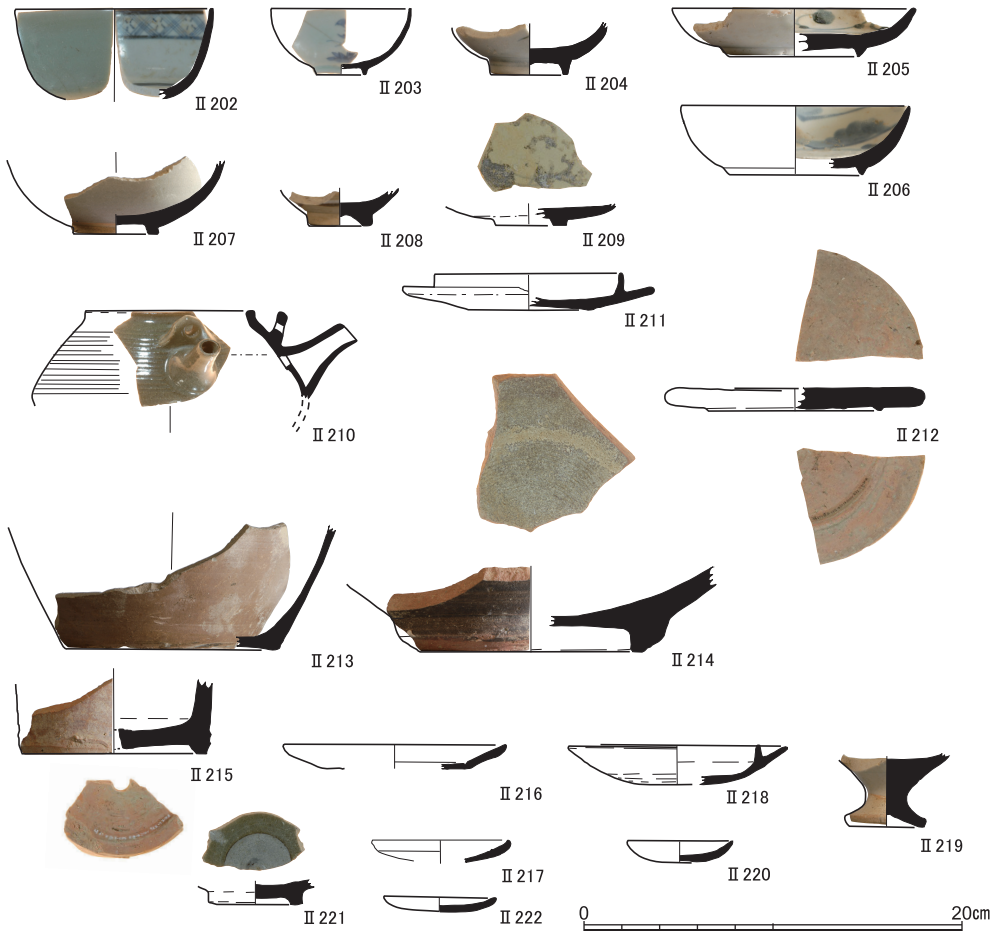


図53 S F 1 出土遺物 (II 202~II 206磁器, II 207~II 215陶器, II 216・II 217土師器), S X 1 出土遺物 (II 218陶器), S X 2 出土遺物 (II 219磁器, II 220土師器), S E 2 出土遺物 (II 221陶器), S E 3 出土遺物 (II 222土師器)

されたものと想定された。近現代の遺物とはいえ、大学附属病院やそこでの給食の歴史、あるいは当時の陶磁器生産と流通を考えるうえで、一定の資料価値を有するものと判断された。そのため、極力食器の種類を網羅しかつ遺存度の良いものを現場で採集することに努め、整理箱5箱分程度を持ち帰った。ここでその内容を報告する(図55~58)。

器種と法量規格 資料の大半は、円形の「醫院」意匠を見込みや側面などにあらわした磁器製の食器(「病院食器」と略記する)である。器種には皿(II 264~II 269)や小椀や小鉢各種(II 271~II 274・II 276), 大椀(いわゆるどんぶり椀: II 286・II 287), 椀や小鉢の蓋もの各種(II 280~II 285), 方形の重ね物(II 288~II 290)がある。皿は、口径

京都大学病院構内A H15区の発掘調査

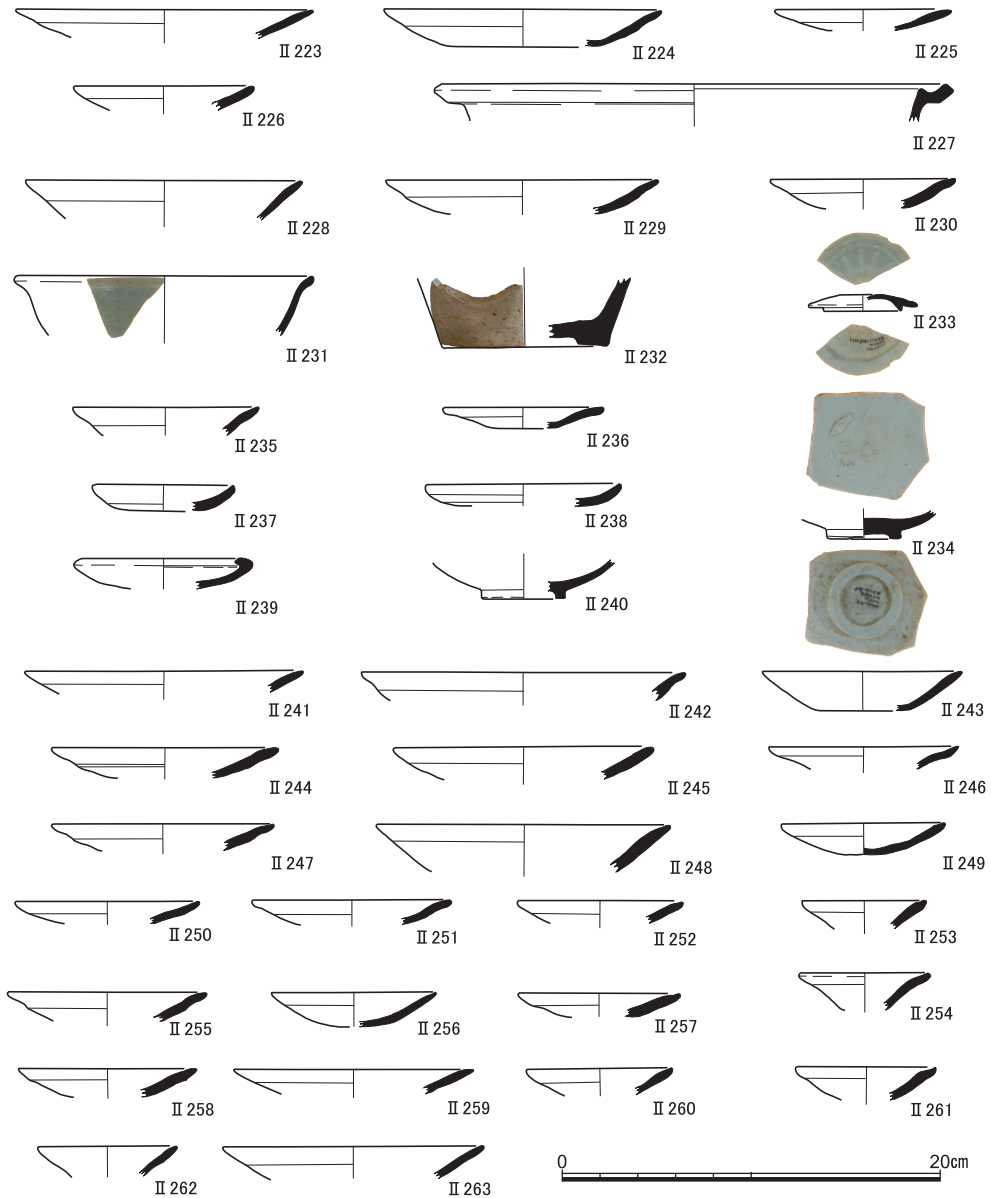


図54 S F 2 出土遺物 (II 223~II 226土師器, II 227瓦器), S X 3 出土遺物 (II 228~II 230土師器, II 231青磁, II 232陶器, II 233青白磁), S X 4 出土遺物 (II 234白磁), SD10出土遺物 (II 235土師器), S R 2 出土遺物 (II 236~II 239土師器, II 240陶器), 淡褐色土出土遺物 (II 241~II 245土師器), 砂礫層出土遺物 (II 256~II 263土師器)

大学附属病院関連の遺物について

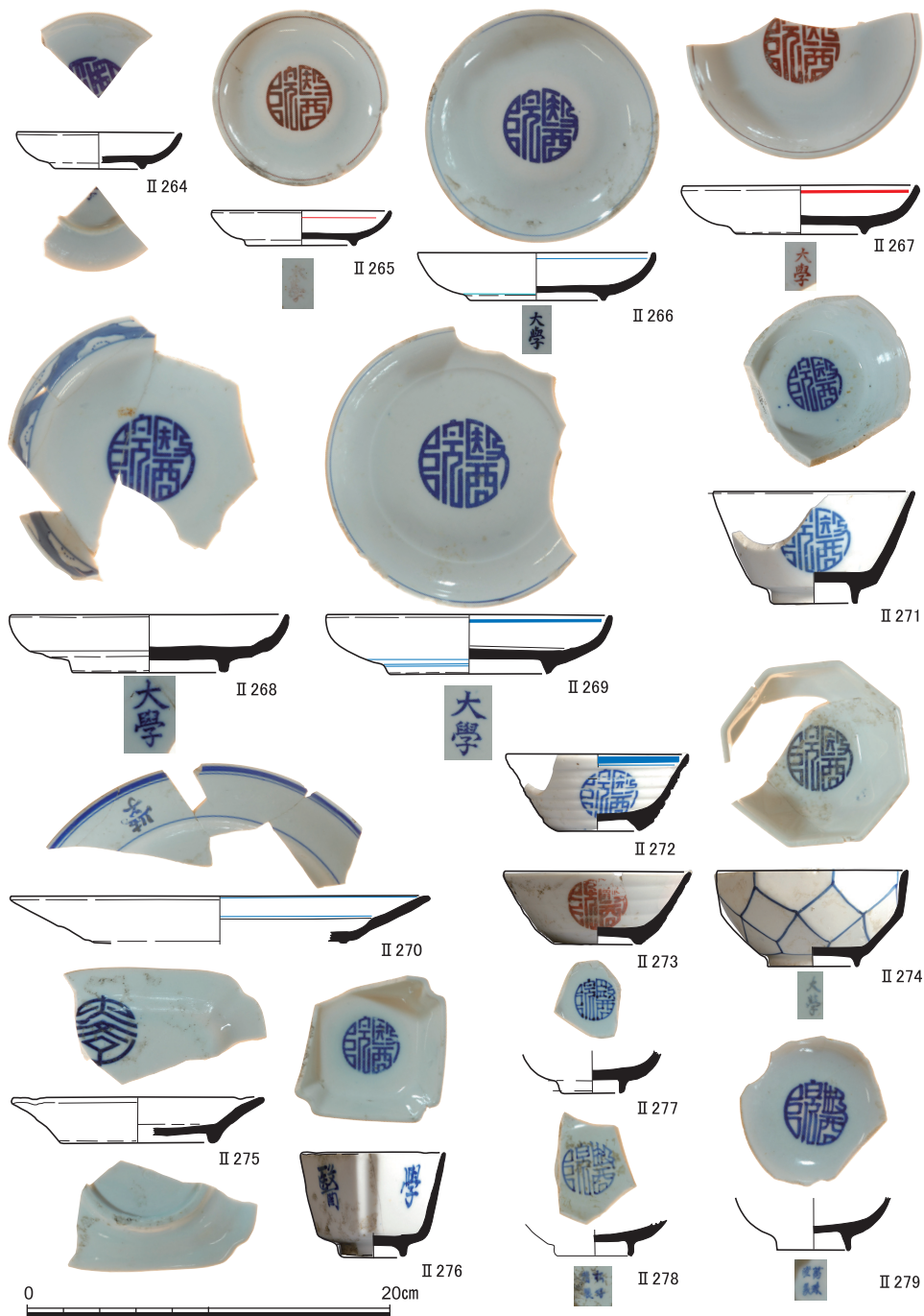


図55 表土・攪乱層出土遺物(1) (II 264~ II 279磁器)



図56 表土・攪乱層出土遺物(2) (II 280~II 290磁器)

大学附属病院関連の遺物について

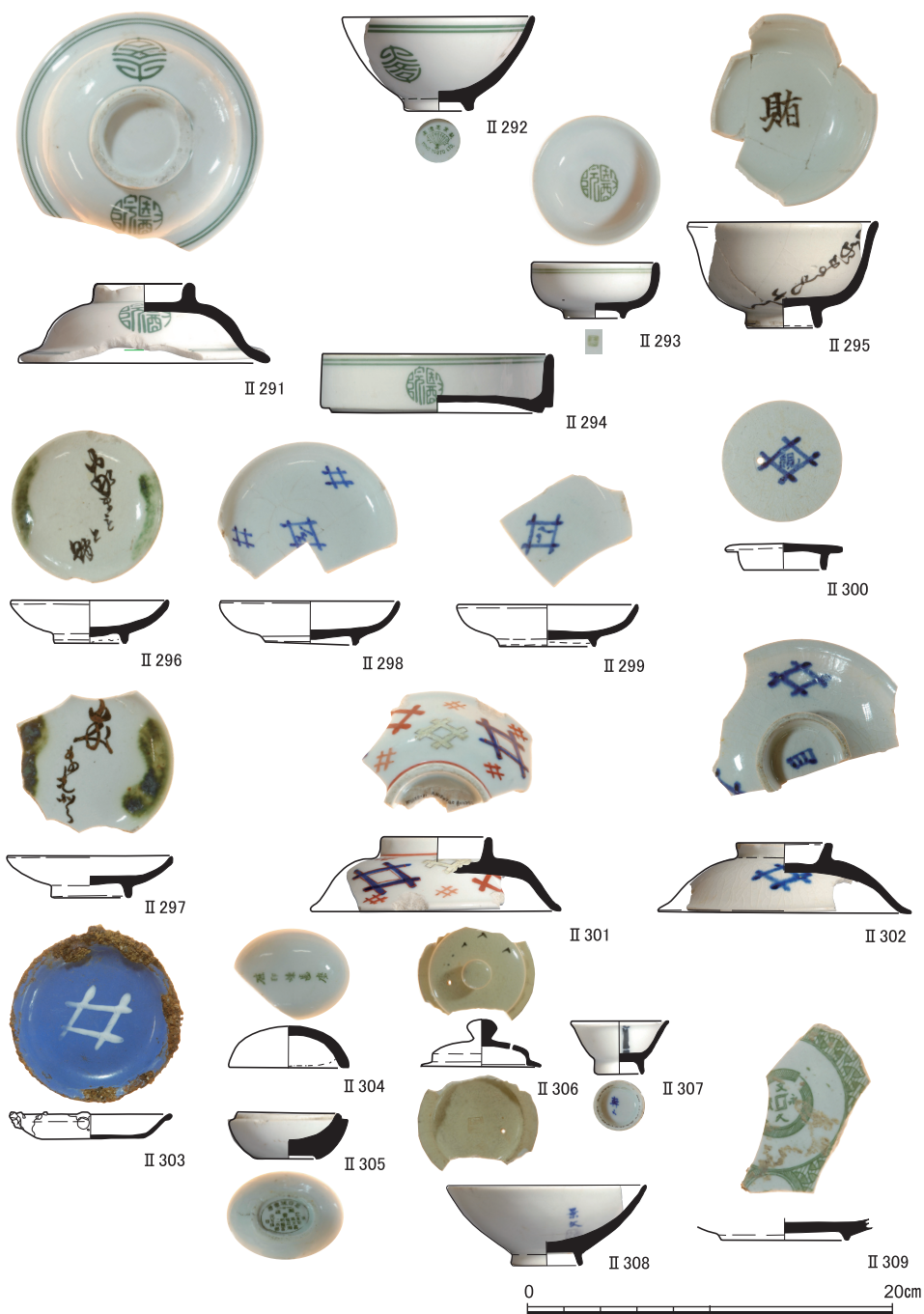


図57 表土・攪乱層出土遺物(3) (II 291～II 302・II 304～II 309磁器, II 303金属製品)

9 cm・13cm・15cmの3種の規格が認められるけれども、小皿の場合Ⅱ264が9.2cm、Ⅱ265が9.8cmとばらつきがあり、あるいは4種の規格であった可能性もある。椀や鉢類では、浅鉢形のⅡ272・Ⅱ273が10cm、筒形のⅡ271が11cm、平面八角形の亀甲状の面取り椀Ⅱ274が10.8cm、大形のどんぶり椀は15cmであり、大別2種、細別3種の法量規格といえようか。このほか、8cm四方の角鉢Ⅱ276があり、外面に1面ずつ「□學医□」（「大學醫院」か）と釉書きされている。なおⅡ270は洋食器風の浅皿で、内面に手書きの「學」字が認められ、胎土は軟質で他と特徴を違えている。Ⅱ275の角皿も、輪花状の切れ込みをもつ特徴的な平面形である。これら2種は一部分のみの遺存であるので確かなことは言えないが、「醫院」の円形意匠についてはもたないようである。

施文の特徴 以上の一群にみられる「醫院」や「帝大」の円形意匠は、藍色ないし朱色で施されている。見込みの平坦面以外に、外面の曲面や屈曲部にも施されているので、特徴から手書きではなく印判の転写を用いていることは明らかと言えるが、使用技法の詳細をすべては復元できていない。藍色のものについては、銅板転写である事をうかがわせる細かな平行線による塗りが確認できる事例だけでなく、細かな布目状網目であるものや、そうでない滲んだ調子のもなどがあり、複数の技法が用いられていたことは確実である。一方、朱色のものについては、剥落して薄くなったり消えてしまった事例も多く（Ⅱ281・Ⅱ284・Ⅱ287など）、透明釉の上から上絵で絵付けしたものであることがわかる。技法がつまびらかにできていないわけではないが、塗りの痕跡から藍色と同様な銅版転写が含まれていることは確認できた。

また、上記の円形意匠以外に、皿類およびⅡ274の鉢では、底部外面の高台内に、それ以外の意匠と共通の藍色あるいは朱色により「大學」銘が施されている。手書きと印判の双方があり、法量の大小におおむね対応して字の大きさも変わっている。

手書きや緑色釉の一群 さて、「醫院」の意匠でありながら、以上とは異なる特徴のまとまりが2群ある。ひとつは、手書きによる「醫院」意匠を見込みに描いた丸椀の底部かとみられる一群（Ⅱ277～Ⅱ279）である。これらのうち2点には底面高台内に「松好精製」「萬珠堂製」の銘を認める。両銘とも京都大学構内の複数地点で出土があり、萬珠堂は近世以来の京の窯業者として現在も存在する。ちなみに同様な手書き「醫院」意匠の一群は、今回の調査地の北東約150mに位置する病院東構内A J 16区（366地点）でも出土があり、やはり高台内面に生産者銘が釉書きされている（網・東2013 図94）。

もう一群は、緑色釉の一群である（Ⅱ291～Ⅱ294）。口縁外面に二重線を施すことが特

徴的で、「醫院」意匠はゴム印によると見られ、かなり簡略化されている。底面に「美濃窯業」の意匠や銘が確認される。東濃地方の製陶業者であり、20世紀前半代にひろく流通が知られる企業である。この点は後述する。

「病院食器」についての課題 意匠や技法などの詳細な検討はあらためて稿を用意することとして、解決すべき今後の重要な課題をごく簡単に述べておきたい。それは、今回の資料群の主体を成している、印判による藍色・朱色の「醫院」意匠を施す一群の生産者や年代、そして意匠採用の経緯である。これらには生産者名を示す手がかりがほとんどない。京都の生産者銘が認められる手書き意匠の一群が、印判によるものに先行するとみるのが自然と思われるので、これらも大学からの大量注文に応じてそのまま引き続いて京都の業者が生産したのか、あるいは他地域の生産になるのか、はっきりできないのである。

ここで問題となるのが、美濃窯業製であることが明らかな緑色二重線の一群の存在である。社史（美濃窯業製陶株式会社2006）に依れば、美濃窯業は大正7年（1918）に耐火煉瓦メーカーとして創業し、製陶部が翌年設立されている。そして、大正9年（1920）片倉製紙紡績から約20万個の注文を受けたことを契機として給食用食器の生産を開始している。社史所収のカタログによれば、昭和6年（1931）に「京都帝国大学医学部附属医院納」として納入食器が写真入りで紹介されており、今回の出土品と同一とみられる意匠と器種が含まれている。大正13年（1924）のカタログにはこうした情報は認められないので、美濃窯業からの納品はおおむね昭和期以降のこととみてよいだろう。そして、調査地南方のAF14区（399地点）北調査区においては、緑色二重線と「醫院」意匠、底面に美濃窯業に付与された「岐1065」の統制番号をもつ皿が出土している（千葉2010 図55-Ⅲ434）。統制番号は、昭和15年8月頃から21年頃まで付されていたとされているが（萩谷2013）、同社は昭和18年（1943）に食器生産を中止しているため、この資料はそれ以前で昭和15年8月頃以降の製作と認定できる製品ということになる。美濃窯業製品の納品時期の下限をその時期とすることができよう。

一方、京都帝国大学に医科大学が開設され、附属医院が設置されるのが明治32年（1899）、附属医院の賄所が今回の調査地に当たる位置に設置されるのは、先述したように大正5年（1916）である。この賄所の設置にともなう需要で大量納品されたとするならば、美濃窯業製品の納入に先行する時期であり、生産者が美濃窯業である可能性は低い、ということになろう。実際、給食用食器として緑色二重線の規格を特徴とした美濃窯業製品と今回の主体となる一群とは、器形や器種に共通性は乏しい。ただし、後者を単純にすべて京都産

とするには決め手がなく、藍色・朱色の「醫院」意匠の細部や施文法にも差異がいくつも存在することも考慮すると、複数の生産者・生産地からなる可能性も十分に考えられよう。例えば、「醫院」意匠は確認できない資料であるが、II275の皿には、楕円形で囲んだ「五陶」の刻印が裏面にみられる。加藤五陶として、現在まで製作を続けている窯業者が瀬戸に存在しており、今後検証をする必要がある。

生産者の問題とともに謎であるのは、円形の「醫院」意匠の系譜と展開である。京都には手書きのものが存在していることは出土品から明らかだが、その誕生の経緯はわからない。そして、それが印判となり、最終的に美濃窯業が全国展開する病院食器の意匠として採用されていく過程も不明である。また、九州大学構内からも類似意匠の製品が出土している。非美濃窯業製であるので、それとは別の経緯で意匠のやりとりが行われたのであろうか。一方で、金沢大学構内出土の病院食器で非美濃窯業製のものは、全く別意匠となっている（金大埋文センター2000 第24図）。附属病院創設期の大学間の交流や系譜関係を反映するのであろうか。

いずれにせよ、これらは病院での食事に用いられた食器である。病院給食の黎明期の状況を探るうえでも興味深い資料であり、生産や流通のみならず、組成や容量など、今後多面的な検討をおこなっていく必要がある。

その他近・現代遺物 最後に、以上のほかにも、表土中からは近～現代遺物が多数出土しており、附属病院関連と思われる資料を中心に、あわせて報告しておきたい（II295～III315）。このなかで目につくのは井桁状の意匠を多用する一群であり、一部は漢数字が井桁内や高台内などに記されている（II298～II302）。病棟や病室の数字かともみられるが、調べきれてはいない。また、時期的、そして機能的に上記してきた「醫院」意匠を有する病院食器類とどのような関係となるのかも、不明である。なお、II315の煉瓦は、西調査区を南北にはしっていた地下通路状の構築物に用いられていたものである。上記した表土層内の大量の磁器廃棄は、この構築物を覆うように形成されていたものである。

5 小 結

今回の調査では、中世以前の遺跡存在は明確にはできなかった。よって調査地南方一带に想定される平安後期の白河北殿や、その後の中世遺跡のひろがりについては、今回の地点までは及んでいない可能性が高い。約50m南方の200（東）地点で中世遺構がみつまっている事を考慮すると、今回地点の南側に北限が想定される。西南方の339（北）地点で

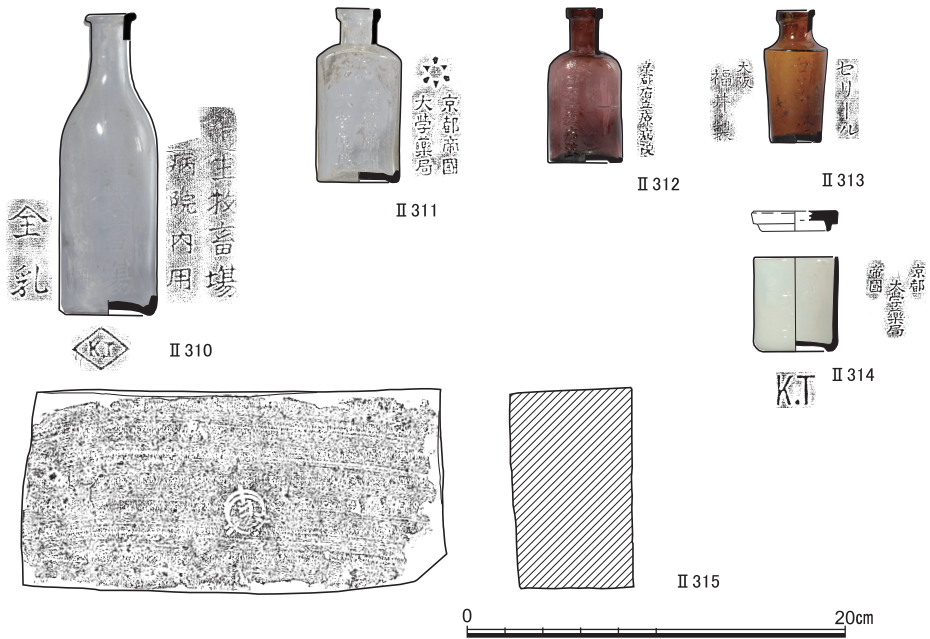


図58 表土・攪乱層出土遺物(4) (II 310～II 314ガラス製品, II 315煉瓦)

は中・近世の路面がみつまっている。今回検出された路面は、近世以前のどの段階まで遡るかはっきりしないが、この339（北）地点と連続する遺構である可能性も考えられる。とすれば、北北東-南南西方向にはしる流路とあわせて、中世遺跡の北限とともに西限を画するのかも知れない。今後、地形環境も配慮しながら、検証を進めたい。

近世の遺構については、おもに幕末期前後に位置づけられる井戸や流路、路面と配石などがみつかった。いずれも堅固に構築され、積極的に土地への働きかけと管理がなされていた様子がうかがわれた。しかし、建物跡などは確認されず、近世段階においては聖護院村近郊の耕作地であり続けていたと理解される。

また今回は、表土中より大量に出土した近代の「病院食器」についても報告をおこなった。文献記録には残されていない資料群のようであり、いまだ不明な側面も多いが、今後の研究の一助となればと考えている。なお、九州大学構内からの出土品については、田尻義了氏（九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）にご教示いただいた。末尾ながら御礼申し上げます。